

ことわざにみる国民性

—社会的性格の研究（II）—

穴 田 義 孝

はじめに

本紀要第13号（1978年9月発刊）において「社会的性格に関する一考察」というテーマで、社会的性格の定義、学説史の概観、筆者の重層的パーソナリティ構造モデル論の提言、人間関係の考察、北海道苫前郡羽幌町焼尻の事例研究等をすでに論述してきた。本稿は、その（II）として社会的性格に関してさらに考察を進めていきたいという意図を持つものである。そうした過程において昭和55年度札幌大学研究助成をいただけたことは幸運であった。

1.

パーソナリティ（personality）という概念には、様々な定義⁽¹⁾がある。その中で必要条件と十分条件を満たす概念としてのパーソナリティ論がある。すなわち、必要条件として、人間個々人により異なる行動傾向がある、十分条件として、一個人をみるならば一貫性、あるいは一定の行動傾向がある、そしてこの必要・十分条件を満たす概念がパーソナリティという概念であるという定義⁽²⁾である。

ところで、人間の行動をみると、一個人に特有の行動傾向がある一方、ある集団という枠組に属する成員に共通にみられる、他の集団成員と比較すると特有の行動傾向がある。これを社会的性格（ソーシャル・パーソナリティ・social personality）という。先の個人のパーソナリティの概念定義の必要・十分条件の“個人”という部分を、“ある集団という枠組に属する成員”あるいは抽象的ではあるが“社会”、“文化”ということばに置き換えて当てはめてみると、社会的性格という概念の定義となると考えられる。すなわち、ある集団という枠組に属する成員により異なる行動傾向がある。そして一つの集団成員の行動を他の集団成員のそれと比較してみると一つの集団成員に一貫した、共通した、あるいは一定の行動傾向がある。これを

社会的性格の概念とするというものである。

これは、ある枠組を具体的に国別にすればその国民に特有の行動傾向としての国民性、都道府県別にすれば都民性、道民性、府民性、県民性ということになる。この中で北海道民特有の行動傾向としての道民性の研究として、筆者は『もう一つの開拓』—道民性の探究—(人間の科学社刊 1980 年 3 月) をすでに発表している。さらに学校別にすれば校風(スクール・カラー)、性別にすれば男らしさ、女らしさ、職共別にすれば例えば生先らしさ(先生くささ)とか職人氣質(かたぎ)等と日常的に使われる概念である。

本稿においては、これらのうちの日本人の国民性に関して、ことわざ(諺)を通して日本人の国民性がどのような内容であるかを明らかにしていくことにする。

ことわざは「古くから世間に広く伝わっている教訓や風刺を含む文句」⁽³⁾であり、「その社会に生活する人々の共通感覚の上に存続している言語伝承であるから、個々がまったく個々で無関係ならば、ことわざなど存在しようがない。」⁽⁴⁾ものである。さらに、ことわざは「長い間の人間の体験によって積み上げられた、よりよく生きていくための知恵の結晶である。」⁽⁵⁾といえる。すなわち、現代の人間生活は環境の変化が著しく、随時その適応の仕方にも相応の変化を余儀なくさせられている状態であるが、ことわざは人間生活の知恵として、普遍的にその意味が生き続けるものであり、例え解釈に変更があったり、本来の出典の意味とは異っても新たな意味づけがなされて生きているものである。そこで、社会に生活する人々の共通感覚ともいえる国民性そのものの内容を象徴的に代弁するものの一つがことわざであると考えることができるわけである。

日本人の国民性をことわざを通して考察するのに際して、その出典が外国の文献であっても、それが日本の社会に生活する人々の共通感覚の上に存続していれば、それを日本のことわざの範疇に含むこと、また、本稿が文献的研究を本旨とするものではないので、ことわざの出典、作者、意味解釈に関しては留意するにとどめることを前提とする。

2.

ことわざを通して日本人の国民性を考察するわけであるが、その対象・方法を明らかにしておきたい。

研究対象のことわざがどの位の数があり、どのように扱われているかをはじめに概観してみることにする。例えば、昭和 56 年 3 月 20 日現在、国立国会図書館蔵のことわざに関する著書は約 90 冊に及ぶものである。⁽⁶⁾

そうした文献を概観してみると、ことわざという用語と格言・金言・名句・名言という用語が類語として用いられていることが分る。これらの区分は、ことわざが作者・出典不詳のものを指し、格言・金言・名句・名言は、作者・出典が明らかなものという指標で区分されているといってもよいであろう。本稿で対象とする“ことわざ”という意味は、後者の格言・金言等もすべて含むものとする。それは、一個人（作者）のことばであっても、その後不特定多数の人々にその適切さが認識され引用、発言されるという意味で、作者不詳のことわざと同じ機能を果していると考えられるからである。

また、ことわざが日常生活の中で使用されるのは、個人がその環境場面で最も適切な時と場所とを瞬時に判断し、最も適切な引用を用いることで効果があげられる。

入学式・卒業式・朝礼等学校行事の場面、入社式や結婚式等のスピーチのようなフォーマル（公的）な場面での引用や、親が子に、先生が学生・生徒に、上司が部下にというようなインフォーマル（私的）な場面でも、年長者や上司がいわゆる下位の者に話をする過程で引用する。

さらにインフォーマルな場面では友人同士、夫婦間でというようにいわゆる同等な関係の中で、あるいは下位の者から上位の者へもしばしば用いられる。

それは、フォーマルな場面の場合の引用とインフォーマルな場面で上位の者が下位の者に話す場面の引用が、多く教訓的、伝承的であるのに対して、同等な関係での引用や下位の者から上位の者への話しの中での引用が風刺や皮肉、切り返し、強調、確認という意味を含むものであることを示している。

そこで、ことわざを用いることは、あるいはことわざが機能する場面では、その含まれる一つ一つの意味内容が適切に引用者に理解され、適切な時と場所で瞬時に判

断され引用されることになる。また受け手の方にもその意味が十分に認識されなければ効果はない。そうしたことわざの役割・機能が十分に生かされる為には、ことわざが日常的になっていることが必要である。

国会図書館蔵の多くの著書を概観してみても九割までが五十音順の辞書、辞典として編纂されていることは、それが実証されていることといえよう。これらは五十音順にことわざが並べられ、一つ一つに一般的意味解釈、類語、反語、出典、ないしは類語にはいるであろうが、英文の同類語が付されていたりする。列挙されている語数が異なるだけで、ほぼ同じ内容の本であるといっても過言ではなからう。

このことは、現在一般書店で入手可能なことわざに関する著書も同様である。⁽⁶⁾しかし、こうした羅列式・公式的な解釈を加えたものばかりではないことも事実である。例えば、第二の分類として、他の国々のことわざを挙げ、国別のことわざが分類されている類、第三に、著者独自のやや主観的解釈がなされている随筆風の類、そしてわずかではあるが、第四に、内容別分類がなされている類がある。

第四の類として、例えば、大後美保『暮らしのことわざ事典』創元社、1980は、食の部、住居の部、被服の部の三部に分類している。また針原孝之『ことわざの基礎知識』雄山閣、1978は、五十音順にしないで便宜的に分類したということわりの上に、①学芸・技能・知識に関するもの、②経済・金銭・価値に関するもの、③男と女・縁・親と子について、④人間関係・礼儀・噂に関するもの、⑤行動の指針となるもの、⑥人生の浮沈・運・不運・タイミングを表現するもの、⑦処生について、⑧自己省察・修養に関するもの⑨人生あれこれの九分類をしている。

この他本稿注(6)に挙げた著書の中では、同じ大後美保氏の『ことわざの真実』—天気・災害・豊凶—三省堂、1956が題名の通り天気・災害・豊凶に関することわざの分類をしている。森竜吉『ことわざの知恵—仏教のこころ—』春秋社、1968は仏教に関わることわざだけを取りあげ他と分類している。岸戸護『諺に学ぶ人間関係』近代経営心理研究所、1968は、人間関係に関することわざを取りあげ考察している。また三好徳行『金言ゴルフ上達法』池田書店、1965なども森氏、岸戸氏の著書のようにある内容に関するものだけを取りあげ、結果的には他のことわざと分類がなされているものとなっている。

ことわざの総数はなかなかつかみにくい。数万あるいはそれ以上とも考えられる

し、人口に膾炙しているものとして、本稿(注)(6)(7)に列挙した著書に載せられているものは平均して一冊につき二千程である。こうした膨大な数のことわざを内容別に分類することは困難なことであり、先に指摘したようなことわざの機能に則した用途としての五十音順の分類はそれなりに意味のあるものであろう。

しかし、ことわざには同類の意味内容をもつもの、同義語的なものが多い。それはそれらが同一場面で同じことわざを何回も使用せず、その場に応じて違ったことわざを引用することで意味を強化させるという実用的機能を持つ。一方それらを内容的に分類し、その内容自体を質的・量的にその何たるかを整理、分析することで、本稿の主旨である日本人の国民性の内容、行動傾向のあるべき姿、あるいはある姿を考察することが可能となると考える。

先の針原氏の分類はそうした意味で示唆に富むものと評価できる。しかし、③男と女・縁・親子についてと④人間関係は同類と考えられるし、⑤行動の指針となるもの、⑥人生の浮沈・運・不運・タイミングを表現するもの、⑦処生について、⑨人生あれこれ、ことわざそのものであり、例えば⑨などはほとんどすべてのことわざが含まれてしまうことも考えられる。

そこで、どのような分類をすることで日本人の国民性の何たるかを指摘しうるかという、ことわざを離れて、社会的性格の一分野である国民性を考察する視点を参考にしてみることが有効であろう。

社会的性格は、言い換えると社会の中での人間の行動傾向である。人間は全く一人で存在しているわけではなく、人間の行為の交換である社会関係を結び、しかも一個人は個人的判断態度における傾向性を持ち生活している。またそうした生活の場は必然的に自然環境の中である。そこで、社会の中での人間の行動傾向を考えるに際し、その環境に対してどのような適応をしているかという側面からの整理・分析がそれらを明らかにすることの可能な方法であると考えられてきた。

その側面は四つある。(Ⅰ)対自然観、(Ⅱ)対社会観、(Ⅲ)人間関係、(Ⅳ)個人的判断態度である。

すなわち、(Ⅰ)対自然観は、人間は自然環境の中で生活しているところから、自然と人間との関係において、自然が人間生活を規定すると考える自然環境決定論、逆に人間が自然を陵駕すると考える自然環境改革論(科学万能論)、自然と人間は互

いに影響しあいその中で人間はできうる限り自然に手を加えていくものとする環境可能論、前三者のように対立する概念として自然と人間を考えず、人間も自然の一部として考える自然融合論のいずれの行動傾向を国という枠組に属する成員として有しているかという考察である。

(II) 対社会観は、社会は個人の集合体であるが、個人は社会より重要な単位であるとする個人主体論、逆に社会は個人の総和以上のものであるとする社会有機体論、個人と社会は互いに関係しあうとする個人社会相互論、個人と社会は対立する概念ではなく結局は同じもの、あるいは次元の異なるものとして対置すると考える融合論のいずれの行動傾向を国民が有しているかという考察である。

個人志向、伝統志向というリースマンの分類概念⁽⁸⁾や、恥の文化、罪の文化のベネディクトの分類概念⁽⁹⁾人間、間人という木村敏氏の分類概念⁽¹⁰⁾もこの範疇である。

(III) 人間関係は、垂直関係と水平関係、同じ垂直関係においてもどのような質的相違があるかという考察である。中根千枝氏のタテ社会の概念⁽¹¹⁾もこの範疇である。

(IV) 個人的判断態度は、その判断態度が、論理的（理性的・客観的）であるか、直観的（感情的・主観的）であるか、あるいは、同じ論理的、あるいは直観的であっても、それが消極的か積極的かというような要因も複合して考察することができるものである。

(I) (II) (III) もそれぞれ対自然、対社会、人間関係に関する個人的判断態度と考えられるが、(IV) はその根底の方向性と考えてよいであろう。

ことわざを分類し、それを通して日本人の国民性の何たるかを指適するには、こうした側面的分類をすることが有効であると考ええる。

(I) 対自然観

(II) 対社会観

(III) 人間関係

(IV) 個人的判断態度

以上の四つにことわざを大別し、さらにすでに論述した各々の側面の問題点を考察していく仮説・検証の過程を本稿では方法論とすることにしたい。先の針原氏の分類も①学芸・技能・知識、②経済・金銭・価値、⑤行動の指針、⑥人生の浮

沈・運・不運・タイミング, ⑦処生, ⑧自己省察・修養, ⑨人生あれこれは, (I) 対自然観, (II) 対社会観, (IV) 個人判断態度にそれぞれ分類しなおされる可能性がある。また③男と女・縁・親と子, ④人間関係・礼儀・噂は, (III) 人間関係に包括されるわけである。⑦や⑨にも (III) の範疇のものがある可能性もあろう。

3.

先に大別した日本人の国民性の四側面は, 以下のようなそれぞれの結論がある。ここでは, そのそれぞれの側面の結論をシンボリックに現わすことわざがあるか否かの検討を試みてみたい。これは, いわば質的な考察である。本稿では紙面の関係で論述しないが, 量的考察(数千のことわざを四側面に分類し, それぞれ何がその主張の根幹となっているかの考察)に関しては別の稿で論述することにする。

(I) 対自然観

対自然観については, 日本人は自然融合観を有している国民であるとされている。それは, 人間と自然は結極は同じである, あるいは, 人間と自然は等値に対置されるべきもので互いに影響しあうという現実より, またどちらかが一方に働きかけるというような方向性や意志を伴った次元のものではない融合的な関係であるという認識の上での生活観である。そうした認識は, 例えば, 悠久の時間の中での人間と自然を考えれば, 個人の人生などささいなものであり, 人間と自然は結合され消極的否定的な行動傾向である無常観となったり, 一方消極的肯定的な行動傾向である悟りの境地といった行動傾向となる。

また具体的な日常生活の中にもそれは見受けられる。民族衣裳である和服の柄には花鳥風月の模様が見られるし, 和食と言われる食べ物に見られるシンボリックな模範的自然の盛り合わせ, 木造建築に見られる木目模様と枚挙にいとまがない。

それでは, こうした人間と自然の対応に関することわざにはどのようなものがあるだろうか。(12)

- (1) 天高く馬肥ゆ (秋高く馬肥ゆ)
- (2) 朝虹は雨 夕虹は晴れ
- (3) 暑さ寒さも彼岸まで
- (4) 雨の夜にも星

- (5) 雨は花の父母
- (6) 一葉落ちて天下の秋を知る
- (7) 雨後の筍
- (8) 大風が吹けば桶屋が喜ぶ（もうかる）
- (9) 河海は細流を選ばず
- (10) 昨日の花は今日の塵（昨日の大尽今日の乞食）
- (11) 桐一葉
- (12) 国破れて山河あり
- (13) 雲をつかむ
- (14) 光陰流水の如し（月日に関守なし）
- (15) 行雲流水
- (16) 五風十雨
- (17) 子供は風の子
- (18) 歳月人を待たず〔歳月を自然の流れと考えるとこの範疇に入れられる〕
- (19) 地震 雷 火事 親父
- (20) 諸行無常
- (21) 人生朝露の如し
- (22) 晴耕雨読
- (23) 大木は風に折られる
- (24) 月に叢雲花に風
- (25) 二百十日の前後
- (26) 一村雨の雨やどり
- (27) 水清ければ魚棲まず
- (28) 桃栗三年柿八年
- (29) 柳に風
- (30) 柳に雪折れなし
- (31) 夕焼けに鎌を研げ
- (32) 雪の果ては涅槃
- (33) 雪は豊年の瑞

(34) 夜上り天気雨近し

(35) 寄らば大樹の陰

(36) 林中に疾風多し

人間と自然に関することわざを三十六列挙したが、これらがすべてではないことはいうまでもなからう。これらは意味を解説しなくても誰もが知っており、日常使用されているであろう頻度の高いことわざと考えられる。これらは、日本のことわざばかりでなく、出典が外国、特に中国のものが多し。しかし、規準があいまいではあるが、日本のことわざとして機能しているものと考えてよいであろう。

ことわざは、ありのままの現実を端的なことば、語呂のよいことばとして集約し、その意味を強調するものと、こうあるべきであるという理想、あるいはこうありたいという願望をその裏面に含むものがある。ところが、こうした人間と自然に関することわざを概観してみると、(31)夕焼けに鎌を研げ、があるべき理想という程のことでもないが、そうする方がよいという表現をストレートに含んでいるだけで、他はすべて、自然のありのままの姿を形容し、その意味を強調しているといつてよい。それは人間と自然が対立するものではなく融合するものということが底流にあるからではなからうか。

自然は人間に様々な恩恵を与えてくれ、人間はそれを観察することで生活の知恵を増していくという生活観が内包していることわざが多いことも指摘できよう。(2)朝虹は雨夕虹は晴であり、(3)暑さ寒さも彼岸までであり、(5)雨は花の父母であり、(8)大風が吹けば桶屋が喜ぶであり、(22)晴耕雨読であり、(23)大木は風に折られるであり、(27)水清ければ魚棲まずであり、(30)柳に風折れなしであり、(32)雪の果ては涅槃であり、(33)雪は豊年の瑞であり、(34)夜上り天気雨近しである。いずれもありのままのことを客観的に述べているものであるが、ありのままなことだけに説得力がある。

これらの反対に当然ではない、むしろ一見して矛盾する、あるいは無理があることをあえて形容することで逆説を強調することわざが人間と自然に関することわざの範疇にある。

石が流れて木の葉が沈む

木に竹をつぐ

西から日がでる

これらがそれに当てはまるであろう。いずれも無理矢理だ、そのようなことは理不尽だという意味を強調するべく使用される。

自然、特に季節のような流転の中にありのままの永遠を見るという融合観といえよう。

また、無常観や悟りの境地を現わしたことわざも人間と自然に関することわざには多い。先に挙げたものの中では、(6)一葉落ちて天下の秋を知る、(11)桐一葉、(12)国破れて山河あり、(14)光陰流水の如し、(15)行雲流水、(18)歳月人を待たず、(20)諸行無常、(21)人生朝露の如しがそれに当たる。人生が絶対的価値観として絶大なものであり、また相対的には塵のごとしでもあり、絶対・相対を統合するという生き様は、日本人の行動傾向のやはりシンボリックな一特徴であると指摘できよう。そして、ことわざもそうした意味を含む類が確かにあるといえるわけである。自然を題材にして、人生観・人間観をことわざは表現しているともいえよう。

自然観に関することわざは、この他地域に特有の生業に関連したものがある。例えば、北海道寿都郡寿都町美谷では、ダシカゼ（南風）が吹く時は漁ができる、オキノカゼ（西風）では出漁できない、アイノカゼ（北風）、ヤマセ（東風）はまあまああ風であり、シカタカゼ（西南の風）は恐ろしい風であるというように、漁業という生業に深く関わった風向きに対するものがある。これが同じ日本海側のやや北に位置する北海道苫前郡羽幌町焼尻では、ヤマセ（東風）が吹くと鍋の中の魚も逃げるといわれ嫌われ恐れられたという。⁽¹³⁾ この事例は、日本海側と太平洋側では異なるものがあるろうし、例えば同じ日本海側でも地域により異なる言い方があることを示すものである。

さらに農業を生業とする場合やその他の生業を営むところでは、漁業の風向きに匹敵する指標があることであろう。

こうしたことわざの地域性に関しては、事例蒐集を行いながら整理することを今後の課題としたい。なお地域性に関することわざは、例えば、大雪や厳しい寒さにはニシンの大漁が見込まれる、昆布やスケソウタラ漁が順調であればニシンも大漁、ニシン曇りという春先きの海霧はニシン群来（くき）のきざしというような、北の漁業での広い地域において共通のことわざのあることを指摘しておきたい。

また、こうしたいいまわしがことわざか否かという議論も成り立つであろうが、

先に引用させていただいた池田弥三郎氏いわく「その社会に生活する人々の共通感覚の上に存続している言語伝承」の範疇に含まれるものと考えられる。さらに広く考察すれば、川柳や狂歌、笑話や民話等のジャンルにおいても国民性をシンボリックに現わすものがありうるとして考察する必要があるであろう。

(II) 対社会観

個人と社会については、日本人は、社会は個人の総和以上のものであるという社会有機体説のように極端ではないにしろ社会優位の行動傾向を有する国民であるとされている。個人は成人となり主体的になるわけであるが、他人の思惑や腹の内が読めない者は一人前とされない。相対的けじめが問題となる。人間関係とも関わりがあるが、ストレートな伝達を避け、腹芸や以心伝心というように非理論的な読みを重要視する。こうしたことから木村敏氏は、日本人は成人して西欧人が人間となるのに対し間人となると指摘しているし、ベネディクトは、行動傾向の根幹に他人を意識し、他人や世間が見ていてみっともない、恥しいという意識が行動を起させたり止めたりすることがあるとして恥の文化と指摘している。さらにリースマンによる他人志向という分類もこうした事情を象徴的に現わすものであろう。世間に様がついて世間様という表現すら使われている。

しかし、その他人、世間は身近かな狭い範囲の人間関係である。欧米人は、仮に他人の目がなくても絶対的な神が常に人間を見守っており、他人がいなくても規範的行動をとり、公德心があるのに対し、壁に耳あり障子に目ありである日本人は身近かな他人がいなければ、旅の恥はかきすてであり、あとは野となれ山となれであり、明日は明日の風が吹くである。流動性のない固定的村落の人間関係がそうした社会性を育成し助長させたものであろう。しかし、根本的には正直の頭に神宿る、正直は一生の宝、誠は宝の集り所であることに違いない。

島国根性という広い視野の欠如も、地理的に周囲を海で囲まれ、鎖国や長い封建制度の歴史を経て形成され、逆に安定した社会がそれを助長させた行動傾向の一つであるといえるであろう。

そこで、渡る世間に鬼はなし、浮世に鬼はない、地獄にも鬼ばかりではない、知らぬ他国にも鬼はない、旅は道連れ世は情けというシンボリックなことわざがあると考えられる。外敵といっても同国人であり、島国の中では異質な人間がおらず同

質的人間の集りであるから、渡る世間や地獄にすら鬼はなく、旅は道連れと楽観的な世界観感情を持つのであろう。

そうした社会の中で、さらに生き様を示唆するものとして、世は柳で暮せであり、棄てる神あれば助ける（捨う）神ありで何とかなる。さらに世間は広いようで狭いものと考え、人間同志の出会いの可能性が大であり、偶然性もあるが事実狭いことも実感する。

世の中は九分が十分とすべて思い通りにはいかないものであり、嫌なことがあっても、世は七下り七上り、世は回りもち、今日は人の身明日は我が身、浮き沈みは世の習い、浮き沈みも一代に七度、二度あることは三度あると沈む時もあればいずれは良いこともあると輪廻を説く。

いずれにしてもどこの烏も黒さは変らぬであり、夜昼あって立つ世の中であり、どこへ行っても甘草の流れる川なない。そして、世間は張り物、内裸でも外錦であり、多くは欲と二人連れであり、欲の世の中、欲の娑婆、欲の袋に底なし、欲に頂なし、うそも方便、うそも世渡り、うそもつかねば仏になれぬであると達観している。

また、世の中は年中三月常月世 十七おれ二十負わず借らずに子三人、常八月夜早稲の米にどじょう汁女房十八我二十というように願望がささやかに持たれ、現実はそのとばかりはいかないので寄らば大樹の陰、箸と主とは太いがよい、犬になるなら大家の家の犬になれ、長いものには巻かれろ、泣く子と地頭には勝てぬ、すまじきものは宮仕え、見ざる聞かざる言わざる、見ぬが仏聞かぬが花、触らぬ神に祟なし、臭いものにはふたをしろと世間様に抗することはしない生き様を示唆している。

世間に抗しない順応性を強調するのは、同質性の中の人間同士で安心感を持つだけではなく、先に見たように世間は張りものであるのだから、外面的見せかけの姿を警戒することも統合して説くことになる。

ほめて千人悪口万人、ほめる人を買ったためしなし、知恵者一人馬鹿万人、村に村姑がいる、そこで口は禍のもとであり、もの言えは口唇寒し秋の風、雉も鳴かすば打たれまい、というわけである。

安心感や同質性は、感覚・知覚における覚閾の同質性をもとに、感情の起伏の少ない持続的安定性を人々の中に作り、人間関係に上下関係を持たせてはいるが、そ

れは階級的固定的なものではなく、ほどほどに欲求水準を高めることを許容し行動の原動力となっている。そこでやや固定的ではあるが活力ある世の中を生み出しているわけである。現代の風潮ともいえる保守化傾向や中間層意識もそうした底流を含む大きな背景の中に成立しているものと言えないであろうか。

この世はもちつもたれつ

give and take

また日本人の社会観に関して、この世はもちつもたれつという象徴的なことわざがある。これを欧米のことわざにあてはめてみると give and take がそれにあたるであろう。この世はもちつもたれつは、この世はというように社会が個人と個人の集合体、あるいは総和以上のものであるという意味が強調され、個人より集団が優先されている。しかもその人間関係はもちつもたれつというように曖昧な関係である。一方 give and take は、個人と個人の関係が強調され、集団より個人が優先されている。そしてその関係は合理性が内包されているといつてよいであろう。

言い換えれば前者は、主にインフォーマルな人間関係を示す、ないしは、フォーマル、インフォーマルという関係を混同し、使いわけていない、いわゆる公私混同の関係を象徴していると考えることができる。後者は主にフォーマルな関係場面のそれを示していると考えることができる。まさに行動傾向の象徴的違いを示すものであろう。

しかし、ことばは生きている。そこで give and take を日本人のある人は自らの行動の指針としている場合もあろう。give and take が日本のことわざの一つとなつつある、すなわち生きている、機能しているわけである。環境の中でいかに適応しているかという課題も人間を考えるに際し重要な課題であり、今後の考察の留意点にしたいと考える。

(III) 人間関係

人間関係に関しては、先の(II)対社会観の中でもすでに若干は触れたが、日本人の国民性としては、風通しの良いタテ関係であるとされている。すなわち、固定的階級社会ではなく、現代において文化的目標としての学歴社会とその制度的手段としての受験制度が仮にあっても誰もが平等にその頂点に挑戦できることがそれを示している。それは蛙の子は蛙、親に似ぬ子は鬼子、瓜のつるには茄子はならぬ、

乞食の子は乞食である、へちまの種は大根にならぬ、というようにそれが無制限でないことを説く一方、とびがたかを生む、竹の子は親まさり、氏より育ち、親の黒いは子が白いとその限定的可能性を説くことわざがそれを示している。

そうした曖昧さは、縁は異なるものの味なものであり、袖すり合うも他生の縁であり、縁なき衆生は度しがたしなのである。

相対的けじめが人間関係のポイントとなる。

ところで人間関係には、様々な具体的関係があるわけであるが、ことわざにおいてもそれらを分類することができる。(A)男と女、(B)親と子、(C)家族・親戚関係、(D)友人関係等である。

(A)男と女に関してのことわざは、次のようなものである。

- (1) 男心と秋の空 (女心と秋の空)
- (2) 女の心は猫の目
- (3) 一生添うとは男の習い
- (4) 男の心と川の瀬は一夜に変わる
- (5) 男は度胸女は愛嬌
- (6) 男は松女は藤
- (7) 男は外回り女は内回り
- (8) 男は三年に一度笑う
- (9) 男は敷居をまたげば七人の敵あり
- (10) 男は裸百貫 (裸一貫・腕一本・ふんどし一貫)
- (11) 男は妻から
- (12) 粉糠三合あれば婿養子に行くな
- (13) 遠くて近きは男女の仲
- (14) あばたもえくぼ
- (15) 蓼食う虫もすきずき
- (16) われ鍋にとじふた
- (17) 人の好き好き笑うもの馬鹿
- (18) 似たもの夫婦
- (19) 女賢うして牛売りそこなう

- (20) 女の猿知恵
- (21) 女の心は猫の目
- (22) 女の知恵は鼻の先
- (23) 女三人あれば身代が潰れる
- (24) 女三人寄れば姦しい
- (25) 女に十二の角あり
- (26) 女の一念岩をも通す
- (27) 女の髪の毛には大象もつながる
- (28) 女に三界の家なし
- (29) 鬼も十八番茶も出ばな
- (30) 夜目遠目笠の内
- (31) 夫あれば親忘れる

男とは、女とは、男と女の違い、男女の仲、こうした内容別にさらに分類できる。男とは、外で仕事をし、七人の敵に対し度胸をもって裸一貫で対処しなければならないもの、女とは、儒教的思想を背景として、所詮猿知恵であるのだから家庭を守り、愛嬌をもって生活するべきだと説く。猿知恵は逆に社会的役割として家庭を守る結果として社会性に欠けた知恵とならざるをえないともいえよう。

しかし女は、感情優先であり岩をも通す一念を持ち、十二の角があるのであるから、女上位の可能性を持つ婿養子にはいくな、番茶も出ばな、夜目遠目でだまされるな、悪女の深情には気をつけろ、とにかくあばたもえくぼで好き好きだが、悪女は六十年の不作あるいは一生の不作である。

一方力なくして世間を渡れない、やはり男は妻からであるから選択は大切である。女も婚姻は、夫あれば親忘れるようになるのだから、また三界に家なしなのだから良い夫を選択しなければならない。似たもの夫婦、われ鍋にとじふたが世の習、あるいはむしろ望ましいというわけである。そして、子のかすがい、子は縁つなぎとなる。

(B)親と子に関することわざは次のようなものがある。

- (1) 親の光は七光
- (2) 親の心子知らず
- (3) 子を持って知る親の恩

- (4) 親の十七子は知らぬ
- (5) 子持てば親心
- (6) 親の欲目
- (7) 親の意見と茹子の花は千に一も仇はない (むだはない)
- (8) 親の意見と冷酒はあとできく
- (9) 総領の甚六
- (10) 兄馬鹿末子馬鹿
- (11) 親擦れより友擦れ
- (12) 親に似ぬ子は鬼子
- (13) 親の因果が子に報う
- (14) 親の恩は子で送る
- (15) 親に先立つは不孝
- (16) 子は三界の首枷
- (17) 子宝はすねが細る
- (18) 老いては子に従え
- (19) 負うた子に教えられて浅瀬を渡る
- (20) 三つ子に習うてあさきを渡る
- (21) かわいい子には旅をさせよ
- (22) 親が死んでも食休み
- (23) 親はなくても子は育つ

親と子の関係は、親の側に関することわざが多い。(22)の親が死んでも食休みと子供の側にまわりのせわしなさにまどわされずゆとりを持ってと言っているものがあるが、これは、せがれ死んでも今一服、隣火事でもまず一服という類語があるように、どのような場合にもゆとりを持ってと一般的に説いている類である。

子は三界の首枷で切っても切れないものだから、かわいい子には旅をさせ、すねを細り欲目をもちながらも子供を育てる、子は七光で親の恩恵を受け、子を視ること親に如かずであり、無駄のない意見を聞き成長するはずであるが、総領の甚六となったり、親の心は子供が自分の子供を持って親となった時はじめて気がつく。孝行したい時には親はなしである。それでも老いては子に従い、負うた子に教えられ

ることもあり、人は順ぐりに人生を全うする。

親が子を育てるという親の機能だけで子は成長するわけではなく、親擦れより友擦れであり、親はなくても子は育つこともあるわけである。

(C)家族・親戚関係に関することわざは次のようなものがある。

- (1) 遠い親類より近くの他人
- (2) 遠き親子より近き他人
- (3) 京の従兄弟に隣かえず
- (4) 親は泣き寄り，他人は食い寄り
- (5) 骨肉の親
- (6) 兄弟は両の手
- (8) 兄弟は他人の始まり
- (9) 他人の飯には骨がある
- (10) 隣の白飯より内の栗飯
- (11) 朋友は六報に叶う
- (12) 嫁と姑犬と猿
- (13) 我が家の仏尊し

家族・親戚に関しては、近隣地縁関係のある他人との比較がポイントになっている。原則としては家族・親戚は大切なものである。骨肉の親であり、兄弟は両の手であり、血縁関係は大切である。なぜならば血は水よりも濃い、血は血だけであるからである。だから朋友も血縁になぞられて六親に叶うであり、何といても他人の飯には骨があり、隣の白飯より内の栗飯が良い。親は泣きより、他人は食い寄りと親身になってくれるのは自ら決っている。

しかし、血縁故にすべてが許せる、信じてよいものとはいえないとも説く。兄弟は他人のはじまりであり、身勝手に我が家の仏尊しといっていればはいられないので、遠い親類より近くの他人なのである。地縁関係は、誕生・婚姻、特に葬儀の時など誰よりもありがたいものである。また狭い世間そのものでもあるわけであり、自ら親しくせざるをえないものでもある。家族の中で嫁と姑が犬猿の仲でも、嫁は嫁、姑は姑でぐちをこぼせる同年代の同質の近くの他人がいて、フラストレーションはやや解消する場合もあろう。

(D)友人関係に関することわざは次のようなものがある。

- (1) 悪人の友を棄て善人の敵を招け
- (2) 傾蓋の友
- (3) 竹馬の友
- (4) 騎竹の交わり
- (5) 肝胆相照らす
- (6) 金蘭の交わり (契り)
- (7) ふんけいの交わり
- (8) 二人心を同じくすれば其の利全を断つ
- (9) 去る者は日々に疎し
- (10) 遠ざかるは緑の切れ目
- (11) 獅子身中の虫
- (12) 後足で砂をかける
- (13) 恩を仇で返す
- (14) 飼い犬に手をかまれる
- (15) 触らぬ神にたたりなし
- (16) 君子危きに近よらず
- (17) 当って碎けろ
- (18) 引いて駄目なら押してみろ
- (19) 虎穴に入らずんば虎子を得ず
- (20) 十人十色
- (21) 類は友を呼ぶ
- (22) 同類相集まる
- (23) 麻につるるよもぎ
- (24) 朱に交われれば赤くなる
- (25) 地獄で仏にあう
- (26) 三人寄れば文珠の知恵
- (27) 三人なれば迷うことなし

男女、夫婦、親子関係に関してはタテ関係、親戚と近所づきあいは血縁・地縁の

比重に関して、ことわざがそのシンボリックな行動傾向を示唆していることを見てきたが、友人関係はヨコ関係であり、幼な友達やちょっと会っただけで親しくなれるような傾蓋の友、肝胆相照らす同等な仲は夫婦とはまた違った重要な人間関係である。

しかし、血縁や地縁とは異り、友人関係は機能集団での出会いが大部分であり、去る者は日々に疎くなり、なかには獅子身中の虫になることもありうる。そこで触らぬ神にたたりなしとして自ら積極的に働きかけないか、当って碎けろと積極的になるかは、個人のパーソナリティにも関係している。十人十色である。

類は友を呼び、相手にも選択の自由があるのだから自らがつまらなければつまらぬ友人しかできない。朱に交われば赤くなるであり、友の選択で良くも悪くもなる。とにかく、三人寄れば文珠の知恵であり、友人は多い程よいというわけである。

人には添うてみよ馬には乗ってみよ

人間は外見だけでは本当の価値はわからないものであり、親しくつきあってみてはじめてその人のことがよくわかるものである。また情は人のためならずであり、誰のためでもない自分の為に、一人では生きていけない世の中でよりよい人間関係を結んでいかなければならないものであろう。

(IV) 個人的判断態度

個人的判断態度については、日本人は直観的（感情的、主観的）であり、しかも瞬時的消極的肯定・否定の行動傾向であるとされている。直接論理的にことばに現わさなくても腹芸や以心伝心で理解し合える。例えば「ええそうですね。」という表現は、yes でも no とでも受けとれるもので、相手はそれを聞いてその場の状況を判断すれば十分理解できるものというわけである。

表情としては、笑ってごまかすわけではないが独特のつくり笑いがあり、泣き笑いや顔で笑って心で泣いてをやっている。そうすることで相手の顔をつぶさないで済み、他人の顔をたてることができる。こうした相対的消極的肯定・否定の曖昧な態度が、一方で以心伝心という情緒的な共感をかもし出し、他方で広い視野を持たない島国根性や非論理的思考を生み、それらが止揚されると絶対的価値観としての悟りや無我の境となり、また無常観となり論理を越えた全人的理解という日本人らしさを形成させたのであろう。その過程には“道”という文字が用いられる。

ことわざは、端的なことばで積極的・断定的にものごとを言い切るものである。とすると曖昧さとは無縁、あるいは矛盾するものと考えられる。しかし、日本人は生活のあらゆる面において何でも取り入れ和洋折衷であるように、ことわざにおいてもあらゆる国のそれを取り入れ自らのものになっている。そしてことわざそれ自体は、他の文物のように独特の変化をもたせて適応することはなく、そのままで使用することで矛盾する反語が同値に並用され、結局は曖昧さを全体として生み出しているといえるであろう。最後の判断は相対的けじめがものをいう。反語、対語は数多い。例えば人口に膾炙したものをいくつか列挙してみよう。

うそも方便；うそつきはどろぼうのはじまり
 カエルの子はカエル；トビがタカを生む
 渡る世間に鬼はない；人を見たらドロボウと思え
 柳の下にドジョウはいない；二度あることは三度ある
 酒は百薬の長；酒はキチガイ水
 好きこそものの上手なれ；下手のよこ好き
 せいてはことをし損じる；先んずれば人を制す
 当って砕けよ；石橋をたたいて渡れ
 二兎を追う者は一兎も得ず；一挙兩得（一石二鳥）
 衣食足りて礼節を知る；武士は食わねど高ようじ
 田舎の学問より京の昼寝；京に田舎あり
 命あつての物種；命より名を惜しむ
 徳をもって怨みに報ゆ；目には目，歯には歯
 話上手は聞き上手；聞き上手の話下手
 歯に衣着せぬ；奥歯にものがはさまる
 下手の横好き；好きこそ物の上手なれ
 兄弟は他人のはじまり；血は水より濃い

これは、両方とも正しいと考えることができるし、両面とも一面的であるとも考えることができる。しかし、正誤が問題なのではなかろう。対立するものではなくて、並列してみると互いに他方の意味を強調し融合し合っているという関係ではなかろうか。そして互いに腹の内では、その反対もいえるが、少なくともその特定の

場ではそちらの方が適切であろうと了解し合うものであろう。

自然融合, 他人志向, 上下関係, 消極的肯定・否定というすでによく言われる日本人の国民性は, ことわざの中に確かに見られるものであった。そして互いにそれらの側面が関連し合って, さらに統合されて日本人独特の行動が生み出されている。

先にも述べたが, こうしたシンボリックなことわざを抽出することを基礎として, 数千のことわざを量的に分類し, さらに日本人の行動傾向の核が何であるのかを探究していきたい。また, 地域差の考察, ことわざの日常的使用における意味変化の考察と社会心理学的再解釈も今後の課題としたい。

(注)

- (1) 拙著『人間の科学としての社会心理学』人間の科学社, 1976, p 43~46
同『人間理解と心理学』人間の科学社, 1977, p 62~p 68, に論述した。
- (2) 南博監訳『図説現代の心理学』講談社, 1976 参照
- (3) 宇随憲治他監修『国語辞典』旺文社, 1965
- (4) 池田弥三郎『暮らしの中のことわざ』旺文社, 1980, p 229~230 引用
- (5) 針原孝之『ことわざの基礎知識』雄山閣, 1978, p 1 引用
- (6) 1 ことわざ同好会 『趣味と実益』ことわざの常識 東栄堂 1957
2 井坂陽一郎 『ことわざ英文法』 評論社 1970
3 奥津文夫 『ことわざ・英語と日本語』 サイマル出版会 1978
4 庄司和晃 『コトワザ学と柳田学』大衆の論理と民間教育法
成城学園初等学校出版部 1973
(成城学園初等学校研究双書 27)
- 5 野田照夫 『ことわざ博物誌』 その1 法学書院 1961
その2 同 1962
その3 同 1963
その4 同 1964
- 6 朝日新聞社 『ことわざ医学事典』 1970
- 7 折井英治 『ことわざ科学』 文芸春秋新社 1963
- 8 国語研究会 『早わかりことわざ・格言・名言集』 新星出版社 1970
- 9 石井庄司^{監修} 『新編 ことわざ格言辞典』 東雲堂出版 1967
- 10 鈴木棠三 『ことわざ歌留多』 東京堂 1961
- 11 土屋道雄 『諺ことわざ 600 選』 池田書店 1970

- 12 堀口健二編 『諺・名言・古語』 池田書店 1956
- 13 与田史人 『新編 諺・名言・古語』 池田書店 1962
- 14 全国地方銀行研究会研修調査センター編
『ことわざ・名言・名句集』よりよい銀行員生治のため 1975
- 15 青垣康雄 『ことわざ・名言選集』 永岡書店 1977
- 16 保坂弘司 『ことわざ名言集』 学燈社 1971
- 17 創先社編集部編 『ことわざ・名言事典』 創元社 1978
『ことわざ新辞典』 創元社 1953
『ことわざ新辞典』(新版) 創元社 1966
- 18 岸戸 護 『諺に学ぶ人間関係』 近代経営心理研究所 1968
- 19 村松暎編『ことわざに強くなる本』あなたの日本人度をテストする
日本経済通信社 1976
- 20 井手三郎 『諺の栄養学』
新しい諺の理解と食生活への応用 第一プランニング 1965
- 21 柳田國男 『ことわざの話』 アルス
- 22 サトウミツル 『コトワザノイズミ』 カナモジカイ 1978
- 23 今井富次編 『ことわざの泉』イギリス・フランス・日本・俚諺集
対照と解説 富山房 1948
- 24 藤井乙男 『諺の研究』 講談社(講談社学術文庫) 1978
- 25 藤井乙男 『諺の研究』 京文社書店 1938
- 26 針原孝之 『ことわざの基礎知識』 雄山閣出版 1978
- 27 東 澄義 『反対語・類語ことわざの心』 文進堂 1973
- 28 外山滋比古 『ことわざの論理』 東京書籍 1979
- 29 庄司和晃 『コトワザの論理と認識理論』 言語教育と科学教育の基礎構築
成城学園初等学校(研究双書8)
- 30 檜谷昭彦 『ことわざの世界』曖昧さと両義性 日本語籍 1979
- 31 柴原恭治 『ことわざの心理学』 黎明書房 1974
- 32 大後美保 『ことわざの真実』一天気・災害・豊凶のことわざから—
三省堂出版 1956
- 33 森 竜吉 『ことわざの知恵』仏教のころろ 春秋社 1968
- 34 田辺貞之助 『ことわざの知恵』 ダイヤモンド社 1969
- 35 上村和人 『ことわざの知恵』 日本文芸社 1978
- 36 俚諺同好会 『ことわざの常識』生活のなかに生き続ける言葉 東栄堂 1969
- 37 磯部芳三 『東西ことわざ入門』 池田書店 1970

ことわざにみる国民性(穴田義孝)

- | | | | | |
|----|------------------|---------------------|------------|------|
| 38 | 伊藤 晃 | 『ことわざパズル』 | 百泉書房 | 1969 |
| 39 | 大後美保編 | 『ことわざ歳時記』 | 毎日新聞社 | 1971 |
| 40 | 土屋道雄 | 『ことわざ365選』 | 池田書店 | 1963 |
| 41 | 小笠原三九郎 | 『ことわざ処世訓』 | 上 学園書院 | 1958 |
| | | | 下 同 | 1958 |
| 42 | 小笠原三九郎 | 『ことわざ虎世訓』 | 実業之日本社 | 1953 |
| 43 | 小笠原三九郎 | 『ことわざ処生辞典』 | 学風書院 | 1956 |
| 44 | 鈴木棠三 | 『ことわざ処生術』 | 東京堂 | 1962 |
| 45 | 田辺貞之助 | 『ことわざ処世術』 | ダイヤモンド社 | 1980 |
| 46 | 青垣康雄 | 『ことわざ小事典』 | 永岡書店 | 1978 |
| 47 | 新国語研究全編 | 『ことわざ小辞典』 | 金園社 | 1980 |
| 48 | 球磨郡錦町老人クラブ連合会編 | 『ことわざ集』 | | 1977 |
| 49 | 下条実彦編 | 『ことわざ中辞典』 | 六月社 | 1966 |
| 50 | 融 紅鸞 | 『とおる・こうらのことわざ人生案内』 | パリ書房 | 1967 |
| 51 | 鮎川晶彦編 | 『ことわざ事典』 | 愛隆堂 | 1954 |
| 52 | 高瀬勝治 | 『ことわざ事典』 | 明治書院 | 1969 |
| 53 | 臼田甚五郎監集 | 『ことわざ辞典』 | 日東書院 | 1971 |
| 54 | 大後美保 | 『新説ことわざ辞典』 | 東京堂 | 1959 |
| 55 | 法学書院・受験新報編集部 | 『現代に生きていることわざ辞典』 | 法学書院 | 1958 |
| 56 | 井上 豊 | 『評釈ことわざ辞典』 | 桜楓社 | 1969 |
| 57 | 折井英治 | 『暮らしの中のことわざ辞典』 | 集英社 | 1962 |
| 58 | 田中秀男 | 『故事成語ことわざ辞典』 | 法学書院 | 1953 |
| 59 | 津村秀男 | 『文学教養趣味 ことわざ辞典』 | 教学研究社 | 1960 |
| 60 | 湧田新編 | 『ことわざ常識』 | 研文堂 | 1964 |
| 61 | 芳賀矢一等編 | 『格言大辞典』 | 文昌閣 | 1916 |
| 62 | 大和信夫編 | 『格言ことわざ集覧』 | 武蔵野書院 | 1954 |
| 63 | 佐藤安志 | 『格言・名句による冠婚葬祭スピーチ集』 | 土屋書店 | 1973 |
| 64 | 堀秀彦編 | 『格言の花束』 | 東京思想研究会出版部 | 1953 |
| 65 | 堀場正夫編 | 『格言の泉』 | 鶴書房 | 1961 |
| 66 | 岡田山仁 | 『格言社長と実行社員』 | フェニックス書房 | 1965 |
| 67 | ラ・ロシューフコー著 関根秀雄訳 | 『格言集』 | 白水社 | 1972 |
| 68 | 藤沢秀行 | 『格言運用必勝法』 | 日東書院 | 1972 |
| 69 | 佐藤大五郎 | 『格言運用必勝法』 | 日東書院 | 1965 |

- 70 三好徳行 『金言ゴルフ上達法』 名手が教えるワンヒント集 池田書店 1975
 - 71 佐山啓之 『処生のための座右銘』 金言名句 日本文芸社 1963
 - 72 安西哲也 『金言名句ハンドブック』 金園社 1963
 - 73 日本文芸社編 『金言・名句による冠婚葬祭スピーチ集』 1972
 - 74 日本文芸社編 『金言・名句による式話・挨拶・司会』 1972
 - 75 全国弁論クラブ編 『世界哲人賢人の言葉』 古今金言名句の泉 信友社 1949
 - 76 青垣康雄 『金言名句 365 日』 一日一言・人生を支える世界の知恵
永岡書店 1974
 - 77 国語研究会 『金言・名句 3000 語』 一人生を支える言葉― 新星出版社 1966
 - 78 創元社編集部 『金言名句新辞典』 創元社 1954
 - 79 加藤孝一編 『若い人の人生指針』 金言名句と人生訓 鶴書房 1956
 - 80 『修差全集』等 3 巻復刻版 (昭和 4 年の複製・金言名句人生画訓)
講談社 1976
 - 81 座右銘研究会 『金言名句人生画訓の事典』 緑園書房 1954
 - 82 教育問題研究所編 『金言の事典』 学芸図書出版社 1953
 - 83 三井晶史代編 『金言聖語辞典』 東方書院 1934
 - 84 大橋武夫 『座右の銘・経営名言集』 ピンチはチャンスなり
マネジメント社 1978
 - 85 穎原退蔵 『名句評釋』 上・下 大日本雄弁会講談社 1949
 - 86 清水平作 『名句評釋』 関書院 1949
- (7) 辞(事)典の類が多い。以下それらを列举してみることにする。いずれも発刊は新しい。
- 1 折井英治編 『暮らしの中のことわざ辞典』 第2版 集英社
 - 2 三省堂編集所編 『必携故事ことわざ辞典』 三省堂
 - 3 古典文学研究会編 『故事ことわざ事典』 弘文社
 - 4 鈴木棠三編 『故事ことわざ辞典』 東京堂出版
 - 5 鈴木棠三編 『続故事ことわざ辞典』 //
 - 6 樋口清之監修 『故事・ことわざものしり辞典』 大和出版
 - 7 高橋源一郎 『故事成語諺語辞典』 明治書院
 - 8 石田博編著 『故事成語ことわざ事典』 雄山閣出版
 - 9 遠藤哲夫編 『故事成句辞典』 明治書院
 - 10 桜井正信他編 『ことわざ・格言辞典』 永岡書店
 - 11 加古三郎他 『ことわざ故事金言小辞典』 福音館書店
 - 12 田島詰介編 『新編ことわざ故事・成語慣用句辞典』 梧桐書院
 - 13 青垣康雄 『ことわざ小事典』 永岡書店

ことわざにみる国民性(穴田義孝)

- 14 津村秀男『文学・教養・趣味ことわざ辞典』教学研究社
- 15 臼田蒙五郎監修『ことわざ辞典』日東書院
- 16 東澄美『ことわざ辞典』文進堂
- 17 佐藤務編『新編ことわざ辞典』むさし書房
- 18 創元社編集部編『ことわざ名言事典』創元社
- 19 永岡書店編集部編『ことわざ・名言辞典』永岡書店
- 20 野本米吉『ことわざ名言辞典』法学書院
- 21 青垣康雄編著『ことわざ・名言選集』永岡書店
- 22 昭文社辞典編集部編『昭文金言名言事典』昭文社
- 23 平井充良編『昭文故事・ことわざ辞典』〃
- 24 佐藤務編『新ことわざ辞典』むさし書房
- 25 折井英治編『新修ことわざ辞典』集英社
- 26 大後美保『新説ことわざ辞典』東京堂出版
- 27 望月久貴監集『実用故事ことわざ辞典』千曲秀版社
- 28 宮内秀雄他編『世界のことわざ辞典』永岡書店
- 29 大島康正監修『心の教養・人生の事典』東京書院新社
- 30 新星出版社編集部編『故事・ことわざ事典』新星出版社
- 31 国語研究会編『ことわざ・格言・名言集』国語研究会
- 32 石垣幸雄『世界のことわざ1000句集』自由国民社
- 33 村松暎他解説『故事名言・由来・ことわざ総解説』自由国民社

その他辞典以外では、以下のような著書がある。いずれも本稿における参考文献でもある。

- 1 池田弥三郎他監集『百人百話』ことわざにみる日本人の心と姿、PHP研究所, 1976
- 2 多田道太郎『ことわざの風景』講談社, 1980
- 3 盛毓度『中国五〇〇〇年の生活の知恵』三天書房, 1980
- 4 陳舜臣『弥逢録』読売新聞社, 1980
- 5 平野雅章『食物ことわざ事典』文芸春秋社, 1978
- 6 宮本邦夫『ことわざ人間学』日本経営社団体連盟弘報部, 1979
- (8) リースマン, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房, 1964
- (9) R.ベネティクト, 長谷川松治訳『菊と刀』社会思想社, 1967
- (10) 木村敏『人と人との間』—精神病理学的日本論—, 弘文堂, 1972
- (11) 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社, 1967
- (12) 以下引用のことわざは、前出注(7)の1, 4, 22, 23, 30, 32, 33を主に参考とし

た。これらは、日常使用される範囲のことわざを載せており、象徴的にことわざを抽出する本稿の意図に合致するものとする。

- (13) 札幌大学穴田ゼミナール編「北海道寿都郡寿都町美谷実態調査報告」(『札幌大学教養ゼミナール論集 No. 6』1979)

同「北海道苫前郡羽幌町焼尻実態調査報告」(同論集 No. 4) 1977